

EGC (English for General Communication)

教材の開発および効果の検証

森下 美和

1. 教育改革計画の目的

国際情報社会の進展に伴い、「実用英語」に対する社会的ニーズが高まる中、近年の大学英語教育には、ESP (English for Specific Purposes) が取り入れられてきている。ESPとは、医学英語・工業英語・ビジネス英語など学ぶ人の目的を明確にした「特定の目的のための英語」の学習法を指す。これに対して、EGP (English for General Purposes) は「一般的な目的のための英語」の学習法であるが、定義があいまいとなりがちである。

昨今、英語の授業の中でコミュニケーション活動を実施する機会が増えていることを踏まえ、本計画では、EGC (English for General Communication), つまり「一般的なコミュニケーションのための英語」に基づく教材を新たに開発することを目指した。

本稿では、プレゼンテーションの授業の中で、上記の教材の一部に基づく口頭練習を行い、ポスター・プレゼンテーションにおいて、プレゼンターがウェアラブルカメラ (Panasonic HX-A500) を装着して発表を行った事例を中心に報告する。

2. 教育改革計画の内容

教育改革計画の詳細は、以下の通りであった。

計画①：リアルタイム・コミュニケーションに役立つと考えられる基本的な例文 100 文を作成し、英語母語話者に例文のチェックや音声録音を依頼する。

計画②：ドットキャンパスなどの学内システム上に教材をアップロードし、2014 年度後期の「外書講読Ⅱ」クラスにおけるプレゼンテーションの授業の中で毎回使用し、例文 100 文の口頭練習を行う。

計画③：授業では、2 回のプレゼンテーション大会を実施し、プレゼンテーションと質疑応答において、上記の例文をどの程度即座に正しく使用できるようになっているかを観察する。

計画④：初回授業と最終授業において、英語熟達度を測定し、教材の効果を検証する。

教育改革計画における特色・独創的な点等は、以下の通りであった。

特色①：語彙を羅列しただけのリストではなく、実際に使える例文のリストを作成する。

特色②：既存の教材を流用するのではなく、本学の学生のレベルや特徴を考慮したうえで例文を作成する。

特色③：2014年度前期の「外書講読Ⅰ」, 「コミュニケーション英語Ⅱ」などのクラスにおいて、初級英語学習者による英語コミュニケーションの実態を詳しく調査し、不足する部分を強化するようなオンライン教材を開発する。具体的には、語彙項目（基礎語彙、場面に即した定型表現など）、文法項目（疑問文、関係詞、受動態、条件文など）、その他（非強勢要素の聴解など）が考えられる。

特色④：上記の例文を暗記するまで（つまり実際のコミュニケーションで使えるようになるまで）練習できるように、スモール・ステップによる学習が可能となる教材を開発する。

特色⑤：英語熟達度テストにより教材の効果を検証した後、必要に応じて修正等を行い、ドットキャンパスなどの学内システムで公開し、非常勤講師を含むすべての英語教員が授業内外で自由に使用できるようにする。

2-1 参加者

2014年度後期の「外書講読Ⅱ」クラスを履修する経営学部の2年次生30名を対象とした。Common European Framework of Reference for Languages (Council of Europe, 2001)によると、英語の習熟度はA（基礎段階の言語使用者）レベルであった。

2-2 シラバス

授業の流れは、オリエンテーション、習熟度テスト、プレゼンテーションの基礎知識についての説明のあと、パワーポイントを使用したグループによるプレゼンテーション（中間発表）と個人によるポスター・プレゼンテーション（期末発表）を行うというものであった。各プレゼンテーションに先立ち、学生はパワーポイントのスライドおよび原稿を作成し、ペアやグループに分かれて、適宜ピア・レビューやリハーサルをおこなった。

テキストには、Presentations to Go: Building Presentation Skills for Your Future Career (Cengage Learning) を通年で使用した。後期は、Project 4 “Introducing Japan” をもとに、日本の魅力を世界に紹介すること、Project 6 “Talking about your future plans” をもとに、学生自身の将来の計画について話すことをそれぞれ発表の目的とした。

2-3 英文運用練習

2-2のシラバスと並行し、EGC (English for General Communication) 教材の一部として、プレゼンテーションにおいて使用頻度が高いと思われる英文30文から成る「プレゼンテーションに役立つ表現集」を作成し、授業内で口頭練習を行った (Appendix)。なお、上記以外の例文については、特色⑤に対応するため、現在公開に向けて内容を修正中であり、本稿での掲載は割愛する。

リスニング用の音声ファイル作成については、聞きやすさや発音しやすさをチェックしながら英文の微調整をすることが必要であると判断した。そのため、計画①を一部変更し、英語母語話者に音声録音を依頼せず、音声読み上げソフト (GlobalvoiceEnglish) を使用

した。各英文の音声ファイルはパワーポイントに埋め込み、制限時間等を設定して教材を完成させた。「全体の流れ」、「質問・コメント」、「表やグラフの説明」などに関する各10文の英文について、以下のようなスモール・ステップによる口頭練習を行った。

- (a) 英文を聞いてリピートする（音声提示・音声産出）
- (b) 英文を見てタイプする（文字提示・文字産出）
- (c) 英文を聞いてタイプする（音声提示・文字産出）
- (d) 英文を聞いてリピートする（音声提示・音声産出）
- (e) すべての英文を言えるようにグループ内で練習し、1人ずつ録音／録画する

CALL教室の中間モニターを使用し、(a)から(d)では、2枚1組のスライドの1枚目で英文を提示した。音声提示は1回のみ、文字提示は10秒間とし、終了すると自動的に画面が切り替わった。2枚目のスライドでは、直前に見聞きした英文を、そのまま表現を変えずに、15秒以内にリピート（音声産出）もしくは30秒以内にタイプ（文字産出）するよう指示した。制限時間が過ぎると自動的に画面が切り替わり、次の英文が提示された。

学生は、各英文につき、(a)から(d)へと練習を進めて行った。(b)、(c)、(d)と進むにつれ、難易度が上がると考えられるが、内容が同じである(a)と(d)のみならず、全体としても正答率が徐々に上がっていることから、スモール・ステップによる英文運用練習の効果が認められた。(e)についても、大半の学生が比較的スラスラと言えるようになっていた。

2-4 ポスター・プレゼンテーション

各学生は、中間発表でグループによるプレゼンテーションを行ったあと、個人によるポスター・プレゼンテーションに臨んだ。期末発表にあたり、彼らはA4サイズのフルカラーでプリントアウトしたパワーポイントのスライド（4～6枚程度）を貼り合わせて、A2サイズ程度のポスターを作成した。ウェアラブルカメラについては、Panasonic HX-A500およびSONY HDR-AZ1VRの機能や使用感などを比較したうえで、前者を採用することとした。

当日は、以下のような手順でプレゼンテーションを行った。

- (1) 各学生は、自分のグループと番号を確認し、グループ毎に、7～8人ずつ教室内にポスターを貼る。
- (2) プレゼンターは、指示に従って自分の番号（1～8）のついたウェアラブルカメラを正しく装着する。
- (3) 残りの学生は、興味を持ったポスターの前に移動し、1つのポスターにつき、2～3人がオーディエンスになる。
- (4) 各ポスターのオーディエンスのうち、ビデオカメラでプレゼンテーションを撮影する人を決める。
- (5) プレゼンター、オーディエンスとも、ビデオは勝手に操作せず、スタート、ストップの合図に従って撮影する。
- (6) プレゼンテーションは5分、質疑応答は1分とする。5分以内にプレゼンテーショ

ンが終わったプレゼンターは、“Do you have any questions?” などと言って質疑応答を始める。質問する人は、最初に必ず“I m (name).”と自分の名前を言う。撮影は質疑応答が終わるまで止めない。

- (7) プレゼンテーションは、1人につき2回行う。1回目が終わったら、プレゼンターはそのままで、オーディエンスだけ別のポスターに移動する。
- (8) 2回目も上記と同じ要領で行い、終わったら次のグループと交代する。

2-5 アンケート

プレゼンテーション終了後のアンケートによると、英文運用練習は、「原稿作りに役立った」、「プレゼンの構成が分かった」、「(クラスメイトのプレゼンで) 話の流れがよく分かった」、「質問の回数・種類が増えた」という意見が見られる一方で、「(ちゃんと覚えていなかった) あまり役に立たなかった」など、練習不足を指摘する意見もあった。

また、ウェアラブルカメラを使用して良かった点としては、「聴衆を意識できた」、「自分の目線に気を付けるようになった」、「暗記するように努力した」、「斬新で面白かった」などが挙げられた。一方、気になった点としては、「操作方法が分かりにくかった」、「少し邪魔だった」、「目線に意識が行き過ぎてしまった」などに加え、「自分がどう映っているのか、声の大きさはどうだったのか」などをその場で確認できないことが挙げられた。

2-6 英語熟達度の変化

計画④にもとづき、教材の効果を検証することを目的に、初回授業（事前テスト）と最終授業（事後テスト）において、英語熟達度を測定した。測定にあたっては、英語のスピーキング力・リスニング力を正確に測ることにより、英語によるコミュニケーション能力を知るためのテストである Versant English Test (Pearson Knowledge Technologies) を使用した。授業の履修者 30 名中、事前・事後テストの両方を受験した 23 名について、有意水準 5% で対応のある t 検定を行った。その結果、事前・事後テスト間の平均点における有意差は認められなかった（両側検定： $t(22) = 0.72, p = .48$ ）。

3. まとめ

本稿では、プレゼンテーションの授業の中で、学生が発表で使用する例文の口頭練習を繰り返したあと、ポスター・プレゼンテーションにおいて、ウェアラブルカメラを装着して発表を行った事例について報告した。

英語熟達度については、事前・事後テスト間で平均点に有意差は見られなかった。また、プレゼンテーション終了後のアンケートにおいても、練習不足を指摘する意見があったことから、英文運用練習については、パワーポイントの教材による学習およびペア／グループワークによる練習の回数を増やしたほうが、より大きな効果が見られたのではないかと考えられる。

授業内で一斉に行うポスター・プレゼンテーションでは、オーディエンスが少人数であ

るため、各学生が緊張せずに発表し、質疑応答に参加し、発表の機会を多く確保できるなどの利点がある。一方、教員がすべてのプレゼンテーションを最初から最後まで見る事ができないという印象を学生に与えるため、公平に評価されているか不安に思ったり、教師の目が届いていないと思って原稿を読み上げたり、日本語を使ったりすることが多くなるなどの欠点もある。

本報告では、授業内のポスター・プレゼンテーションにおいて、プレゼンターがウェアラブルカメラを装着することにより、上記のような問題点を解決する可能性について述べた。プレゼンテーションをオーディエンスの視点からビデオ撮影する試みはこれまでも多く報告されているが、発表者の視点からビデオ撮影するというのは新しい試みであった。ウェアラブルカメラを使用したプレゼンテーションでは、プレゼンターの目線で自分自身の発表とオーディエンスの質疑応答の様子を録画でき、オーディエンスによるビデオ撮影では、プレゼンテーション全体の様子を客観的に録画することができるというそれぞれの利点があったと考えられる。

今後は、本計画におけるプレゼンテーションのようなコミュニケーション活動を取り入れた授業の中で、定型表現などの口頭練習の機会を増やし、より適切なインストラクションやフィードバックを与えられるように工夫したい。

なお、本報告に先立ち、2015年3月7～8日に開催された日本英語教育学会（JELES）第45回年次研究集会（於：早稲田大学）および2015年8月4～6日に開催された外国語教育メディア学会（LET）第55回全国研究大会（於：千里ライフサイエンスセンター）で、本計画に関する発表を行った。

Appendix：「プレゼンテーションに役立つ表現集」（「一般的なコミュニケーションのための英語」のリストより抜粋）

〈全体の流れ〉

1. Hello, everyone. I'm Tom Cruise.
2. I'm a second-year student at Kobe Gakuin University.
3. I'm in the faculty of Business Administration.
4. Today, I'd like to talk about Japan.
5. First, let me talk about Japanese history.
6. Now, let me move on to the next topic.
7. In conclusion, Japan is a safe country.
8. This is the end of my presentation.
9. Thank you very much for your kind attention.
10. Do you have any questions?

〈質問・コメント〉

1. May I ask you a question?
2. Could you repeat it?

3. Could you tell me more about it?
4. Can you give me a reason?
5. What did you mean by that?
6. What's the difference between A and B?
7. Please speak more slowly.
8. I agree with you.
9. Your presentation was very helpful.
10. I learned a lot from your presentation.

〈表やグラフの説明〉

1. Please look at this pie chart.
2. I'd like to explain this bar graph.
3. The vertical line shows the number of people.
4. This graph shows that the quality will improve.
5. According to a survey, Japanese society is aging.
6. This survey is based on interviews with 200 students.
7. There are about 40 thousand schools in Japan.
8. Australia is 20 times larger than Japan.
9. 50% of the people are interested in English.
10. We expect the number of visitors to grow by 10%.